

近代ギリシアをめぐるふたつのイメージ
シャトーブリアン『パリからエルサレムへの旅程』
についての一考察

畑 浩一郎

Two Images of Modern Greece:

An Analysis of Chateaubriand's *Itinéraire de Paris à Jérusalem* —————

In 1821, Greece began to wage a war of independence against the Ottoman Empire. The struggle for freedom of a mostly Christian country perceived as the cradle of western civilization gathered sympathy in France as well as in the rest of Europe. This feeling of sympathy is often referred to as "philhellenism." François-René de Chateaubriand became the leader of this movement with the publication in 1826 of the fifth edition of *Travels in Greece, Palestine, Egypt, and Barbary, during the years 1806 and 1807*. In the introduction, he fiercely criticized the French government for not contributing to the Greek cause.

Nevertheless, Chateaubriand's image as the standard-bearer of philhellenism needs to be reexamined through a rereading of his travel memoirs published in 1811. In this book, he wrote that the Greek nation was old and decadent, and opposed Greece's independence in the near future. His point of view is closed to "mishellenism," an anti-Greek sentiment that had been common in Europe for many years.

During the 15 years after the publication of his travel memoirs, Chateaubriand's views on Greece changed gradually, but there was one aspect of his analysis that remained the same: his disgust for the autocratic regime of the Ottoman Empire. The fact that Greece became decadent under Turkish rule, justified, in Chateaubriand's mind, the country's struggle for freedom.

はじめに

1821年に勃発したギリシア独立戦争は、フランスをはじめとするヨーロッパ諸国にも大きな反響を巻き起こすことになる。トルコ支配からの解放を求めるギリシア人たちの戦いは当初、西洋列強諸国の指導者たちの目には好ましいものとは映らない。当時のヨーロッパは1815年に成立したウィーン体制の下にあり、この体制の原則はフランス革命前の状態に復帰することと、大国の勢力均衡を保つことにあったからである。現状の地図を塗り替える可能性のある動きは、どんなものであれ見過ごすわけにはいかないとされたのである¹。

それに対し、世論は早くからギリシアに同情的であった。ギリシアは他ならぬ西洋文明の揺籃の地であり、またその住民の大多数は自分たちと同じキリスト教徒である。そのギリシア人が、残虐な異教徒トルコ人と戦うという構図には、いにしえの十字軍の武勲を思い出させるものがあり、西洋人の心にギリシア人への強い共感を呼び起こすことになる。実際に義勇兵としてギリシアへ渡った西洋人の数は九百四十人、そのうち戦死者は三百十三名に登るという記録もある²。新聞は日々熱烈な筆致で現地の状況を報告し、さまざまな政治パンフレットが次々と刊行される。1821年のシュトゥットガルト、1823年のロンドンに続き、1825年にはパリにもギリシア支援協会 (Comité philhellène de Paris) が設立される。義援金を集めるべく、各地で宴会、コンサート、絵画の展覧会、演劇の上演会などが開催される。ギリシア問題は今やフランス国民全体の関心を集める一大事

¹ 実はロシアは前世紀のエカチェリーナ二世時代より、トルコ支配に対して蜂起を繰り返すギリシア人には好意的であった。同じ正教徒としての絆を手掛かりにこの地に勢力を伸ばし、ひいてはボスフォラス・ダーダネルス海峡を抑える狙いがあったのである。一方、英国はインドへの通商路の確保という観点から、この地にロシアの勢力が増大することを危惧していた。フランスも、大国二国に出遅れるわけにはいかず、ことギリシアをめぐることはこうした微妙な外交事情によって、列強諸国はお互いに身動きが取れなくなっていたということもある。

² Voir William Saint-Clair, *That Greece might still be free, The Philhellenes in the War of Independence*, Open Book Publishers, Cambridge, 2008, p. 354-356.

件となるのである。

芸術面において豊かな作品創造のきっかけとなったことも、ギリシア独立戦争の特徴である。最も知られているのは、絵画の領域でのドラクロワの仕事であろう。《キオス島の虐殺》(1824年、虐殺自体は1822年4月)や《ミソロンギの廃墟に立つギリシア》(1826年)は、今この瞬間に起きている残酷な出来事を見る者に生々しく伝え、フランス国内に大きな衝撃をもたらすと同時に、フランス・ロマン主義絵画を代表する傑作となる。それ以外にもギリシア独立をテーマにした絵画は枚挙に遑がなく、たとえば1826年にギャリ・ルブランで開かれた展覧会では、なんと百九十八点の絵画がギリシア独立戦争を扱っていたという³。また音楽の分野でも、ロッシーニのオペラ《コリントの包囲》(初演1826年、パリ・オペラ座)や、ベルリオーズのカンタータ《ギリシア革命》(1825-26年)などが挙げられる。

文学の領域でもまた活発な活動が見られる。アレクサンドル・ギロー「ギリシア人へのオード」、ガスパール・ド・ボンズ「ギリシア人の蜂起」、アルフレッド・ド・ヴィニー「エレナ」、カジミール・ドラヴィーニュ「メッシニアの女たち」など、有名無名を問わず多くの文学者がこぞってギリシア独立戦争をテーマにした詩作品を発表する。1824年のミソロンギでのバイロンの死は、ラマルチヌに「ハロルド遍歴の最後の歌」を書くきっかけを与え、デルフィーヌ・ド・ゲーは韻文詩「ギリシア人のための募金」で直接的な金銭援助をフランス人に呼びかける。他方、一八二七年のアカデミー・フランセーズ主催の詩のコンクールでは、テーマに「ギリシアの独立」が選ばれている。こうしてギリシア独立戦争は、文学の領域でも豊かな作品創造につながっていくわけだが、その最大の成果はユゴーの『東方詩集』(1829年)であろう。ここで詩人は、残酷なトルコのくびきからの解放を求めるギリシア人の戦いを高らかに歌い上げている。

今日ではあまり知られてはいないが、この時期、ギリシア支持の機運を

³ Voir Fani-Maria Tsigakou, *La Grèce retrouvée, artistes et voyageurs des années romantiques*, traduite de l'anglais par Zéline Matignon, SEGHERS, 1984, p. 49.

ヨーロッパに盛り上げるのに大きな役割を果たした文学者がもうひとりいる。初期フランス・ロマン主義を代表する作家シャトーブリアンである。彼はかつて聖地エルサレム巡礼の旅を行い、その途中でギリシアの地を踏んでいる。帰国後、その体験は旅行記『パリからエルサレムへの旅程』(1811年)にまとめられる。それから十五年の時を経て、作家はギリシア独立戦争真っ只中に、再びこの旅行記を刊行し(1826年の全集版、初版から数えて第五版となる)、作品に新たな息吹を吹き込もうとする。このときに新たに書き下ろした序文の中で、作家は次のように言う。

『道程』は、今日起こっている出来事によって、新たな興味を掻き立てることになった。いわば時の書(un ouvrage de circonstance)となったのだ […] ⁴。

作家によれば、かつて自分が実際にギリシアを旅をした時には、この地に興味を持つ人などほとんどいなかった。それが今や西洋の全国民が、固唾を呑んでギリシア人の奮闘を見守っている。だが恥ずべくことに、各国の指導者は、そこになんら援助の手を差し伸べようとはしない。その無気力さをシャトーブリアンは激烈な言葉で弾劾する。

英雄的な闘争をただ黙って見ているだけのこの世紀に不幸あれ。ぬくぬくと、将来に対する見通しも持たずに、ひとつの国民が虐殺されるままに放っておくことができるか！ この過ち、いやむしろこの罪には、遅かれ早かれこの上もなく峻烈な懲罰が降るだろう (p. 696)。

⁴ Chateaubriand, *Itinéraire de Paris à Jérusalem*, dans *Œuvres romanesques et voyages*, éd. Maurice Regard, Gallimard, Bib. de la Pléiade, t. II, 1969, p. 696. 以降、『パリからエルサレムへの旅程』からの引用はこの版に拠るものとし、引用文末にページ番号を記すこととする。

作家はまるで予言者のように、現状の政策を取り続けた場合にフランスが被るであろう将来の厄災を警告する。こうした峻烈な序文に加えて、全集版の『道程』には、「ギリシアに関するノート」等、いくつかの後書きの関連文書がつけ加えられる。そのことによって旅行記は新たな価値を帯びることになり、「ギリシア人を支援すべし」という強いメッセージを発することになる⁵。

実際に、同時代の評価においても、ギリシア独立に関してシャトーブリアンが果たした役割は広く認められている。たとえばジュール・ジャンンは次のように言う。「シャトーブリアンはオリエントから帰還した際、『道程』、『殉教者たち』、そしてギリシアの自由をもたらしたのだ。[…]偉大なる詩人バイロン卿をギリシアに向かわせ、そこで死を迎えさせた、しかも羨むべき死を迎えさせたのはシャトーブリアン氏である⁶。」ジャンンによれば、バイロンがギリシアに赴き、そこで劇的な死を迎えることになったのは、シャトーブリアンの影響であると言う。さすがにそれは言い過ぎの感があるが、いずれにせよここで重要なのは、1820年代のフランスでわき起こったギリシア人への共感とその独立を支援しようという動き⁷の中心にシャトーブリアンがいたという点である。

だが果たして本当にそうなのだろうか？『パリからエルサレムへの旅程』を今一度丁寧に読んで行くと、シャトーブリアンがギリシア人に対し最初からシンパシーを抱き、トルコからの独立を願っていたというのはむしろナイーブな見方であるように思える。作家の近代ギリシアに対する見方はもっと重層的で、逆説的ですからあるのである。本稿では、この作品の

⁵ 「ギリシアに関するノート」を中心とした1820年代のシャトーブリアンのギリシアにまつわる考察については、以下の拙稿を参照のこと。「シャトーブリアンと親ギリシア主義——「ギリシアに関するノート（1826）をめぐって——」『聖心女子大学論叢』第131集、2018年、19—41頁。

⁶ Jules Janin, 《Argument. Itinéraire de Paris à Jérusalem》, dans *Œuvres complètes de Chateaubriand*, Pourrat Frères, t. IX, 1836, p. 205.

⁷ この動きは、一般に《philhellénisme》と呼ばれる。日本語訳としては「親ギリシア主義」という語が用いられることが多いが、この訳語にはやや違和感が残る。その意味するところは何らかの思想や価値観ではなく、むしろ感情的な側面が強いからである。

ギリシアに関する記述を読み直すことで、旅行記が初めて発表された時期のシャトーブリアンの考えを検討していく。そして、そのうえで作家のギリシアへの見方がどのように変化していくのかという問題を考察することにする。

1. ギリシア上陸

シャトーブリアンはイタリアのトリエステから海路でギリシアに入る。上陸は1806年8月10日、メッシニア地方のモドンの町（現メトニ）近くであった。その時の印象を、作家は旅行記に次のように記している。「一時に下船し、ギリシアの地を踏んだ。オリンピアから十里、スパルタから三十里、テレマコスがメネラオスにオデュッセウスの消息を尋ねるためにたどった道の上にいた。パリを発ってからまだひと月も経っていなかった。」(p. 780) 作家が発するこの第一声から、シャトーブリアンがギリシアという土地について強い色眼鏡をかけていたことがわかる。彼にとってのギリシアはまず何よりも、古代オリンピック競技の行われた場所、英雄レオニダス王の故地、そしてホメロスに歌われた土地として現れるのである。この地では歴史と現実が交差し、書物で学んだ知識が目の前に現前する。不可思議で、かけがえのない場所としてギリシアは作家の前に広がるのである。

作家はその後、ペロポネソス半島を馬で横断する。トリポリ、ミストラスを経て、コリントスへ。コリントスからは船に乗り、アッティカ地方へ。アテネでは、高名な考古学者で、この地に住んで十年以上になるフランス領事フォヴェル氏の家に泊めてもらい、その案内で各地を回る。8月23日にはアテネを発ち⁸、ケア島（キクラデス諸島の島、ケオス島とも呼ばれる）に向かう。そこからスミルナへ向かう船に乗り、シャトーブリアンのギリ

⁸ 「残念なことに、23日にアテネを発ってゼアへ向かわれたシャトーブリアン氏のことを名残惜しく思います。」フォヴェルからショワズール＝グフィエ宛書簡。Chateaubriand, *ibid.*, p. 1700, note 1 de page 854.

シアの旅は終わる。

日数にしてわずか二週間ほどのギリシア旅行はしかし、作家に強い印象を残す。彼はそこからさまざまな思考の材料を汲み取り、それを旅行記の中に結実させていく。『パリからエルサレムへの旅程』のタイトルが示す通り、彼の旅の本来の目的地は聖地エルサレムのはずである。ところが旅行記中でギリシアに割かれた記述は実に全体の四分の一を占め、これはエルサレムに割かれたページの分量を超えている。ギリシアは作家にとって、目的地エルサレムに匹敵する重要性を帯びているのである。

では実際のギリシアは、作家の前にどのような姿を現わすのだろうか。シャトーブリアンの筆が拾い上げるのは、近代ギリシアの悲惨ばかりである。干からびた土でできた住居は、人間のというよりは動物の住処にふさわしい。ほろをまとった女子供は、外国人やイエニチェリ⁹の姿を見るとさっと逃げていく。ヤギまでもが怯えており、山の中に散ってしまう。旅行者を迎えるのは、唸り声を上げる犬だけである。「こうした光景のせいで、過去の思い出の魅力から引き離されてしまう。」(p. 902)

人間だけでなく、土地もまた悲しい現実を晒している。村はいたるところで放棄され、家は無人となっている。作家が十五里進む間、一人の人間に会うこともない。この国に漂うのは濃い死の影である。「ギリシアという国自体が自ら喪に服することで、その末裔の不幸を告げようとしているようだ。」(p. 903) ほとんどの土地は耕されていない。当然、大地には作物はなく、単一で荒涼としている。川といったものもなく、あるのは小さな水の流れや、夏には枯れる急流ばかり。こうした貧弱な国土から何か生産的な行為を期待するのは無理というものなのか。シャトーブリアンは次のように言う。

田舎には耕作地は全くないか、ほとんど見当たらない。耕作者の姿を見ることもまずない。荷車や、鋤に繋がれた牛に出会うこともない。

⁹ 本来はスルタン直属の精鋭奴隸兵士部隊を指すが、ここではトルコ人兵士ぐらいの意。

岩の上に今でもまだ、古代の車輪の轍の跡が確認できるというのに、そこに現代の轍の跡が全く見つからないというのは何とも悲しいものだ (p. 903-904)。

ギリシアという国の土地が不毛なのではない。最後の一文が示すように、古代にはこの地でも労働が行われていた。今それが行われなくなっているというのは、明らかに現在のギリシア人に問題があるのだ。

ギリシアという土地についてシャトーブリアンが常に指摘するのは、古代の栄華と現在の悲惨さの対比である。政治、哲学、文学、芸術など、すべての分野において西洋文明の先駆けとなった古代ギリシアは今や死に絶えてしまった。代わりに現在のギリシアに見られるのは、無知で、怠惰で、墮落しきった恥ずべき人間たちであり、彼らが輝かしい祖先の栄光に泥を塗り続けているというのである。例えば、旅行者が雇ったギリシア人の御者は、道中ずっと歌を歌い続ける。作家は考え込む。この旋律はヴェネツィアからもたらされたものなのか、あるいはフランス人との出会いから生まれたものなのか、それとも古代から伝わるものなのか。昼に夜に聞かされるこの歌の起源をさぐることは諦めざるを得ない。ただ作家が思うのは「この地では、マイナデス¹⁰の声が轟き渡ることはもはやなく、ムーサの女神たちの合唱も途絶え、ただ不幸せなギリシア人が物悲しい嘆き歌に乗せて、故国の不幸を嘆いているように思える」(p. 797) ということである。神話と結びついた古代ギリシア独自の歌唱は、もはや耳にすることはできない。今では由来すらよくわからぬ、怪しげな嘆き歌が、近代ギリシアの暗い現状を表しているのである。

2. ギリシアをめぐるふたつの見方

近代ギリシアに対するこうしたネガティブな評価はしかし、決してシャ

¹⁰ 古代ギリシア神話に登場する酒神バックスの巫女。神がかり状態になり、金切り声を上げるとされる。

トーブリアン独自のものではない。それどころか西洋における「ギリシア嫌い」(mishellénisme)の伝統は歴史が古く、また根強い。サルガ・ムッサは、近代におけるギリシアのイメージを、主にフランス人の旅行者の記述を手掛かりに考察している。ムッサによれば、奇妙でかつ逆説的でもあるのだが、ギリシア人に対する不信感は、本来古代ギリシア・ローマを再評価するはずのルネサンス期にも見られるという。たとえば十六世紀の哲学者・文献学者ギヨーム・ポステルはギリシア人について「泥棒」ときめつけ、西洋文明の母などという権利を主張するのはおこがましいと主張する¹¹。旅行者たちの評価もまた手厳しい。ムッサは例えばアンドレ・テヴェエの『レヴァントの天地学』(1554年)を引く。

かつてあれほど名を知られ、あれほど高貴で、あれほど光り輝いていたあの集団が、今では盲になり、暗闇に包まれているとは、なんとという物事の変転か！ だが見てみることにしよう、この集団が、つまりギリシアのことだが、かつて持っていた光明を¹²。

これは一例に過ぎず、他にも多くのフランス人旅行者が、同時代のギリシア人について否定的な意見を述べている。その批判は、彼らの祖先、つまり古代ギリシア人の栄華が輝かしいがゆえに、ますます辛辣なものとなる。

他方、こうしたギリシア人に対するネガティブなイメージは、辞書の用例からも確認できる。たとえば1732年に刊行されたトレヴーの仏語辞書では「ギリシア人」という項目に、「賭け事でイカサマをする人」という意味を当てている。またトレゾール仏語辞書は、十五世紀の用例として「ギリシア人」の同意語に、「ぺてん師」escroc、「詐欺師」filou、「ずる賢い人」ruséを挙げている。さらにリトレ仏語辞典も同様の意味を挙げた上で、用

¹¹ Sarga Moussa, 《Le débat entre philhellènes et mishellènes chez les voyageurs français de la fin du XVIII^e siècle au début du XIX^e siècle》, *Revue de littérature comparée*, n° 272, 1994, p. 413.

¹² André Thevet, *Cosmographie de Levant*, éd. F. Lestringant, Genève, Droz, 1985, p. 87.

例として1758年に刊行されたP. ルソーの著作のタイトル、すなわち『ギリシア人、あるいは賭博の運勢を変える人々の歴史』を掲げている。いずれもギリシア人が西洋人に掻き立てる不信感の表れとみなすことができる。

このようなギリシア人に対する蔑視、不信感はどこから来るのか。無論、宗教の問題は無関係でない。しばしば指摘されるように、ギリシア人は信仰の面で二度罪を犯したとされる。まずは正教徒になったこと、そしてコーランのくびきに入ったことである。大シスマ（1054年）によって東西教会が分離して以降、ギリシア人はキリスト教徒であるかもしれないが、カトリックではない。「カトリック」対「正教徒」という対立は、しばしば、「キリスト教徒」対「イスラーム教徒」という対立よりも溝が深い。さらにコンスタンチノーブル陥落以降、ギリシア人は異教徒トルコ人の支配下に入った。十八世紀のフランスは、いわゆる「オリエントの専制」(le despotisme oriental) のクリシェが醸成されていく時代である¹³。スルタンを頂点としたトルコの支配構造は、奴隷の主人に対する絶対的な服従関係を基盤とすると思なされてきた。そのような野蛮な民族の支配下に置かれた以上、ギリシア人の退化、墮落も必然と考えられたのである。

ここで十八世紀後半のフランスにおけるギリシアのイメージを見るにあたって、ヴィンケルマンの『ギリシア芸術模倣論』（1755年）と、バルテルミ神父の『青年アナカルシスのギリシア旅行記』（1788年）に触れずに済まずのは片手落ちとなる。ドイツの美術史家ヴィンケルマンは、芸術の理想を古代ギリシアに置いた。彼の『ギリシア芸術模倣論』は次のような言葉で始まっている。「日に増し世界に広まっていく良き趣味はもとギリ

¹³ 例えば十八世紀の哲学者ヴォルネーは次のように言う。「トルコ人の精神とは、過去に築かれたものと未来の希望を破滅させることにある。無知蒙昧な専制主義の野蛮においては明日というものは存在しない。」Volney, *Voyage en Syrie et en Égypte* (3^e édition, 1799), Fayard, 1998, p. 19. ヴォルネーのこの著作は、エジプト遠征時のナポレオン・ボナパルトも絶賛し、「嘘をつくことのないほぼ唯一の本」という言葉を残している。(Moniteur, 5 brumaire an VIII) また「オリエントの専制」については、以下の論文も参照。Jean-Claude Berchet, 《Le despotisme oriental》, dans *Chateaubriand ou les aléas du désir*, Belin, 2012, p. 194-239.

シアの蒼空の下に形をなし始めたものである¹⁴。」こうした考え方がこの後、ギリシアの芸術を模範とする新古典主義の理論的支柱となっていくことはよく知られている。他方、バルテルミ神父の『青年アナカルシスのギリシア旅行記』は、旅行記と銘打つものの、純粋なフィクションである。スキタイの哲学者アナカルシスの子孫がペリクレス時代のギリシアを旅するという荒唐無稽な筋立てだが、大成功を収め、大部であるにも関わらず各国語に翻訳された。

このように十八世紀後半には、ギリシアについて好意的な見解も見られるようになってはきたが、それらはいずれも古代ギリシアに向けられていることに注意しよう。近代ギリシアをめぐるのは依然、否定的な意見が主流であり続ける。とりわけ現地で実際に見聞してきた旅行者の意見は説得力を持って受け入れられる。例えば1779年に東洋学者サヴァリーは、エーゲ海の島々やクレタ島を実際に訪問した上で、次のように書いている。

感じやすい旅行者は、あれほど数多くの忘れがたい出来事の舞台となった場所を何としてもこの目で見たいという熱意に導かれて、今後とも長らくかの地を訪れることになるだろう。だが、なんとということ！彼が見いだすことになるのは、自由で、知恵があり、勇敢な民族ではなく、卑怯で、無知な奴隷となるのだ¹⁵。

十八世紀末にいたるまで、近代ギリシア人に対する蔑視、不信感は根強い。シャトーブリアンが『パリからエルサレムへの旅程』で見せる、ギリシア人に対するマイナスの見解は、むしろこちらの伝統に連なったものとも言える。1820年代のギリシア独立戦争時に彼が見せることになる、あの熱狂的なギリシア支援者の姿を、そのままシャトーブリアンのギリシア観として受け入れてはならない。

¹⁴ ヴィンケルマン『ギリシア美術模倣論』澤柳大五郎訳、座右宝出版、昭和51年、15頁。

¹⁵ Claude-Étienne Savary, *Lettres sur la Grèce*, Onfroi, 1788, p. 2.

3. 過去を忘れたギリシア人

実際、旅行記の中で、シャトーブリアンはどのようにギリシア人との出会いを描いているのであろうか。一言で言えば、作家の目には、近代ギリシア人は「過去の記憶を失った人間」として現れる。いくつか例を見ていこう。スパルタを訪れた作家は、この都市国家が実際にあった場所を確認しようとする。彼によれば、旅行者は皆アテネには立ち寄るが、スパルタにまで足を延ばす人はほとんどいないのだと言う。リュクルゴス、リュサンドロス、そしてレオニダスの活躍した都市の跡地をぜひ確認したいのだが、うまくいかない。作家は同行の通訳兼ガイドに助けを求める。

「ここがミストラか」私は通訳に言った。「ラケダイモンというわけだね。」

通訳は答えた。「シニョール？ ラケダイモン？ 何ですか？」

「ラケダイモンかスパルタか、と言ったのだ。」

「スパルタ？ 何ですか？」

「ミストラはスパルタなのか、と聞いているんだ。」

「何を言っているかわかりません。」

「なんだと！ 君、君はギリシア人なのに、ラケダイモン人なのに、スパルタの名前を知らないのか！」(p. 816)

ここに見られるのは、単なる外国語によるコミュニケーションの不全だけではない。確かにふたりは片言のイタリア語と英語で会話を行い、旅行者はそこにフランス語や、下手な現代ギリシア語を交えてなんとか意思疎通を図ろうとする。だが、ふたりの会話が機能しない真の原因はそのような言語的なものではない。それは古代ギリシアに対する思いの深さの差にあるのである。

作家はフランスを発つ前に「スパルタについて可能な限りあらゆる情報

を得る努力をし、ローマ時代から現代までこの都市の歴史を追った」(p. 814) と言う。旅行者がそれだけの思い入れを持って、スパルタの跡地を訪れているのに対し、ギリシア人の通訳の方は、そのようなはるか昔の事柄にいかなる価値があるのか理解できない。彼が旅行者に知ってもらおうとするのは全く別種のものである。「道案内が私に真新しい廢墟を見せようとし、またトルコの武人^アやトルコの将官^ガ、イスラームの裁判官^バや領主^シの話^カをしよう^スと大声を上げているのを振り切^テって、私は大急ぎで城から降りた。」(p. 818) ギリシア人通訳にとっては、見知らぬ遠い祖先のことなどよりも、現在の生活に関する事柄の方がはるかに重要に思えるのである。

またデーメテールの秘儀で知られるエレウシスでも、旅行者は衝撃を受けることになる。海を挟んで対岸に見えるサラミス島の姿は、作家の想像力を過去へと誘う。「エレウシスの宗教行列を思い浮かべたり、サラミスの海戦を見つめるペルシアの無数の軍勢で岸辺を埋めてみたりしたが、私の想像力では足りなかった。」(p. 852) ところが驚くことに、ペルシア戦争を決定づける海戦の行われたこの地の名前をギリシア人は知らないのである。「いったい誰が信じられるだろう！ サラミスは今日、ギリシア人の記憶からはほぼ完全に消し去られているのだ。」(Ibid.) サラミスの名前も、知将テミстокレスの名前も、今では全く忘れ去られてしまっている。シャトーブリアンにはその事態がほとんど理解できない。かつて、十代の終わり、古代ギリシアは文字通り彼を魅了したものだ。『墓の彼方からの回想』で作家は追憶している。ホメロスやクセノフォンをフランス語に翻訳し、その合間に、古代ギリシアの歴史を学ぶことが、若き自分にとっていかに大きな喜びだったか、と。「当時、私は幸いなことにギリシア語に熱狂していた¹⁶」。かつて本で親しんだ歴史の舞台をようやく訪れることができたというのに、肝心のギリシア人たちが自分たちの過去をまるで知らないのである。作家は強い嘆きと憤りを発する。「故国に対するギリシ

¹⁶ Chateaubriand, *Mémoires d'Outre-Tombe*, Livre 4, chap. 8, éd. Jean-Claude Berchet, Bordas, t. I, 1989, p. 258.

ア人のこのような無知は、嘆かわしいと同時に恥ずべきことだ。」(p. 852)

近代ギリシア人は、自らの栄光ある過去について全く無知である。シャトーブリアンはそのことを残念にも、またもどかしくも感じる。だがこれらのギリシア人にしても、もし自らの歴史を少しでも知ることにできれば、わずかたりともかつての栄光に再び近づくことができるのではないだろうか。たとえば、外国からの旅行者と接することで、ギリシア人も自分たちの祖先の価値について学ぶ機会を得ることもある。ペロポネス半島中央に位置するトリポリの町の近くを訪れた作家は、そこに残る古代の遺跡の碑文をひとつずつ確認していく。わずかに解読できる語があると、作家はこの上ない喜びを覚える。付近にはまた、古代のメダルも落ちている。作家は言う。

近くの野原ではたくさんのメダルが見つかる。農夫から三枚買ってみたが、それが何なのかを農夫は全く説明してくれなかった。ただ法外な値段で売りつけてきた。旅行者の姿を見慣れてきたせいで、ギリシア人は自らの古代の遺物が持っている価値について知り始めてきているのだ (p. 803)。

ギリシア人も自らの過去を学びつつある。だがそれは祖先の栄光を知り、自分たちもそれに少しでも近づこうというためではない。それは単に金儲けのためでしかなく、古代ギリシアの栄華は墮落しきった近代ギリシア人の小遣い稼ぎの種となっているのである。

輝かしい古代ギリシアと嘆かわしい現在のギリシア、引き裂かれたふたつのギリシアを前にしてシャトーブリアンの思いは複雑である。作家の感情は絶えず揺れ動き、ひとつの見解に定まることはない。スパルタの跡地を前にして彼が叫ぶ言葉はその揺れを示している。「なんと美しい光景だろう！　なんと悲しい光景だろう！」(p. 822) 彼の抱いた印象は、発話されるや否や、直ちに別の感想によって補完、修正されなくてはならないの

である。またここに見られるように、彼の旅行記のギリシアに関するページでは「悲しい」(triste)という語が何度も繰り返される。作家は墮落してしまったギリシア人に対し批判的な見解を持つ。だが、だからと言って誹謗中傷するわけではない。古代と現代の間に横たわる絶対的な断絶を前にただ悲観するのである。スパルタの跡地で彼が発する叫びに誰も返してくれる者がいないのは、この断絶の深さを示している。

感嘆の念と苦悩の念が入り混じって、私の歩みと思考を止めた。あたりの静寂は深かった。人の声のものは聞こえないこの土地で、せめてこだまに語ってもらおうと思った。私はできる限り大声で「レオニダス！」と叫んでみた。この偉大な名前を返してくれる遺跡は一つもなかった。スパルタですら彼のことを忘れ去ってしまったようだった(Ibid)。

作家はまるでひとり相撲を取っているかのようなようである。彼が追い求めるものは現実のギリシアには見つからない。彼の旅はひたすら幻滅を繰り返すことで進んでいく。

こうしたシャトーブリアンのギリシア旅行の特徴は、ミストラスでのある出来事が象徴的に表している。作家はこの町の有力者であるイブライム・ベイへの紹介状を携えていた。早速、面会に行くと、このトルコ人は歓待してくれ、作家を夕食を出してくれる。初めてのトルコの食事に作家はとまどうが、食事のふたりの会話はそれなりに進む。旅行者の通訳を介して、このトルコ人はいくつも質問を投げかけてくるのである。

彼は、商人でもないし、医者でもないのに、どうして私が旅をしているのかを知りたがった。私はいろいろな民族を見るため、とりわけ今では死に絶えてしまったギリシア人を見るために旅をしているのだと答えた。それを聞いて彼は笑い出した。トルコまで来たのだから、きっ

とトルコ語を学ぶ気なのだろうと彼は答えた (p. 808)。

ここでも会話は噛み合わない。だがその原因は、おそらくシャトーブリアンの側にある。そもそも「いろいろな民族を見るため」というのが、これほど大掛かりな旅行の目的であることは、すでにトルコ人の理解を超えているだろうが、さらに「今では死に絶えてしまったギリシア人を見る」ということは、もはやおとぎ話の域に入っている。いかにすれば、すでに死に絶えてしまった人間を見ることができるのだろうか。トルコ人が大笑いするのもごく当然である。シャトーブリアンは、現実には存在しないものを探し求めているのである¹⁷。

4. 文明と野蛮

シャトーブリアンがギリシアで見いだすのは、「退廃」(corruption)である。ここでは国土が退廃し、人間が退廃している。退廃は目に見える形でも、見えない形でも常に作家を取り巻いている。例えば彼は次のように言う。

現代ギリシアの建築物は、今日スパルタやアテネで話されているあの退廃した言語に似ている。あれがホメロスやプラトンの話していた言語だと言い張っても無駄である。粗野な単語や、外国語の構文が混じってしまっ、聞いていると常に野蛮人の気配が感じられる (p. 901)。

「退廃」というのは、単に質が悪いということだけでなく、以前はよりよい状態にあったということを前提とする。建築物しかり、言語しかり、ギリシアでは現に見えているものの背後に、常にかつてあった輝きの幻が

¹⁷ おそらくシャトーブリアン自身も、そのことを意識している。かつての勇敢なアテネ人にまつわるトゥキディデスの文章を引用した後で、次のような謎めいた言葉を述べているのである。「だがこの民族は、その後どうなってしまったのだろうか？ どこに行けば見つかるのだろうか？ [...] この問いに対する答えを見つけに行くのはエルサレムだったが、私は前もって神託の言葉を知っていた。「主は死と生をもたらされた。私たちを地獄へ下らせ、そこからまた引きあげてください (傍点は原文ラテン語 出典はサムエル記上 2 : 6) (p. 865)。」

感じられる。旅行者を嘆かせるのは、単なる情けないギリシアの現状だけではない。彼の心を苛むのは、本来あるはずのものが見当たらないという「不在感」なのである。

作家によれば、現在のギリシアで話されている言葉は、とうてい古代ギリシア語の高みにはないと言う。その後、外国語の単語や言い回しが入って来て、「退廃」してしまったのだ。今では「野蛮人」(les Barbares)の気配が感じられると言う。それは由々しき事態である。というのも「野蛮人」というのは、本来、古代ギリシア人が異民族に対して軽蔑的に使った呼び名であるからである。古代にあっては、全ての間人はギリシア人(ヘレネス)か、野蛮人(バルバロイ)かのどちらかであった。そしてその線引きの基準となるのは言語であり、正しいギリシア語を話すことができるかどうかで分けが決まるのであった。バルバロイというのは「聞き苦しい言葉を話す者」という意味である。ところが現代のギリシア語を聞くと、「野蛮人」の気配が感じられるという。かつて両者を厳密に区分していた指標は曖昧となり、もはやヘレネスもバルバロイも変わらなくなってしまった。まさに退廃という他ない。

シャトーブリアンはある時、奇妙なギリシア人の若者と出会う。旅の途中で食事をしていると、ふらりとやって来て彼の前に座り込む。そして旅行者の一挙一動を貪るように観察するのである。言葉は一言も発しない。頭を前に伸ばして、旅行者が乳製品を食べている椀の中まで覗きこもうとする。旅行者が立ち上がると、若者も立ち上がる。旅行者が座ると、若者もまた座る。旅行者が葉巻を差し出すと、大喜びをし、身ぶりで一緒に吸おうと誘う。食事を終え、旅行者が発せると、若者は半時間もの間、後からついてくる。相変わらず一言も発することはなく、何が望みなのかまるでわからない。金をやってみると、即座に捨ててしまう。旅行者に同行するトルコ人の道案内が追い払おうとするが、若者は抵抗する。この謎めいたギリシア人の若者の姿に、シャトーブリアンは感慨を覚える。

私は心を打たれた。なぜだかはよくわからない。おそらく、この私、文明化された野蛮人 (Barbare civilisé) が、野蛮人となってしまったギリシア人 (Grec devenu Barbare) の好奇心の対象となっているのを目にしたからだろう (p. 833)。

二千年以上の時を経て、ギリシア人と野蛮人の対立は逆転し、交差してしまった。今や、野蛮人であったはずのフランス人が文明化し、かつて唯一の文明人であったギリシア人が野蛮に墮してしまったのだ。両者の間に共通して理解できる言語はもちろんない。旅行者と若者の間に、言葉による意思疎通の試みが見られないのはそのためである。

サルガ・ムッサはこのエピソードに着目し、ギリシア人の若者の不可解な動作に、将来のギリシア独立の兆しを読み取っている¹⁸。つまりフランス人旅行者の一挙手一投足に目を凝らし、その動作を模倣するということは、文明国フランスを模範にすることで、ギリシアが再びかつての活力を取り戻そうとしていることの表れだと言うのである。若者が、自分を追い払おうとするトルコ人に抵抗しようとするのは、オスマントルコの支配から自由になろうとするギリシアの将来の姿を暗示しているのだとも言う。確かに興味深い解釈である。このエピソードに、シャトーブリアンがそこまでの意味を込めたかどうかは別問題として、野蛮に墮したギリシア人が失ってしまった「過去の記憶」を今も保持しているのは西洋人であるという考え方は確かに作家に認められる。

自らの祖先の偉大さを知らず、恥ずべき愚かさや無知を晒す近代ギリシア人の姿は嘆かわしい。果たしてこの人間たちはいつの日か、自由で、文明的な社会を手にすることができるのだろうか。そのためにはまず手始めに、自らの栄光ある過去の記憶を取り戻さなければならない。ギリシア人を「再教育」する役割は、かつての野蛮人である西洋人にある。

¹⁸ Voir Sarga Moussa, *La Relation orientale*, Klincksieck, 1995, p. 58.

ギリシア人は自らの歴史を知らないばかりでなく、彼らの栄光をなすあの言葉についても知っている者はほとんどいない。神聖な熱意にかられて、ある英国人がアテネに住み着き、そこで古代ギリシア語の授業を行った (p. 852-853)。

古代ギリシア文明の価値を知る西洋人は、こうしてその後裔が記憶を取り戻すための手助けをすることができる。それはまさに文明人の仕事である。だが他方で、その同じ古代ギリシアについての知識がまた、西洋人に対して正反対の行為、まさに野蛮な仕業を手がけるきっかけを与えもする。パルテノン神殿の大フリーズを削り取り、母国へ運び去ってしまったのも同じ英国人ではなかったか。シャトーブリアンはギリシアでの西洋人の蛮行をこう嘆く。

ヨーロッパの文明化された国民が、百五十年の間に、あらゆる野蛮人が数世紀の長きにわたって成した以上の害悪を、アテネの建造物に成してしまったこと指摘するのは悲しいことである。アラリック¹⁹やメフメト二世²⁰がパルテノンに手をかけなかったのに、モロジーニ²¹やエルギン卿がそれを破壊してしまったのを考えるのはつらいことである (p. 747)。

もはや何が文明で、何が野蛮なのかわからない。両者を隔てていた区分は曖昧となる。文明人を自称している西洋人も、一皮むけば、蛮族と変わらないのである。

¹⁹ 西ゴート族の王。410年に起こった、ローマの略奪で知られる。

²⁰ オスマン帝国第七代スルタン。コンスタンティノープルを陥落させ、ビザンツ帝国を滅ぼす。「征服王」の異名をとる。

²¹ フランチェスコ・モロジーニは十七世紀のヴェネツィア総督。オスマントルコとの戦争において、パルテノン神殿に大砲を打ち込み、神殿内にあったトルコ軍の火薬庫を暴発させ、建築や彫刻に甚大な被害を与えた。

こうして文明と野蛮の対立構図が無意味化していく中で、シャトーブリアン独自の身の処し方が浮かび上がってくる。それは、作家個人の自我に歴史全体を収斂させていくことである。「ギリシア人」、「フランス人」などといった区分はもはや意味を持たない。むしろ全てが個人の実存に回収されていく。たとえばエウロタス川のほとりを行く旅行者は、次のような言葉を漏らす。

プルタルコスが伝えるラケダイモンの男たちがかつてそのほとりを彷徨ったこの川、その川は、今やこうして忘却の数世紀を経て、皆から見捨てられる中、名の知れぬひとりの外国人の足音がその岸辺に聞こえるのをきっと喜ばしく思ったことだろう。1806年8月18日、午前9時、私はエウロタス川に沿って、たった一人で進んだ。それは私の記憶からは決して消えることはないだろう (p. 827)

かつてスパルタの兵士たちがほとりを進んだエウロタス川は、その後、人から忘れられていく。プルタルコスに書かれたラケダイモンの男たちの勇猛を知るのは、今では自分ただひとりである。シャトーブリアンは、書物が伝える歴史に、きわめて具体的な日時、つまり1806年8月18日、午前9時、という現実の楔を打ち込む。そのことによって古代と現代との時間を一気に接合しようとするのである。その媒介となるのは、シャトーブリアンという個人そのものである。

二千年の時間を超えて、古代ギリシアの栄華を現前させるというこの離れ業が可能になるのは、あくまで作家個人の自我が起動力として働くからである。そのためには自我は研ぎ澄まされていなければならない。だからこそ作家は「たった一人」であることを強調するのである。サラミスの島を前に、シャトーブリアンは、かつて海を朱に染めたペルシア軍とギリシア軍の大海戦に思いを馳せる。この時も作家は一人である。

夕方のそよ風でさざ波が立ち、それが砂浜に押し寄せ、私の足を濡らした。しばらくの間、テμισトクレスの墓を洗う海に沿って歩いた。どう考えても、私は今この瞬間、ギリシアでこの偉人のことを記憶している唯一の人間だった (p. 853)。

たった一人であるからこそ、歴史と現実の間に親密なかけ橋アンチームがかけられる。誰もが忘れ去ってしまった過去を記憶している唯一の人間として、作家は特権的な立場から古代ギリシアと向き合うのである。

終わりに

自らの目でギリシアの現状を観察したシャトーブリアンは、この国の将来をどう考えたのであろうか。作家はギリシア旅行の最後で、数ページにわたって自分の考えを統括している。そこに見られるのはやはり、悲観的な意見である。

文明化したヨーロッパをめぐることで満足する旅行者は、実に幸せだ。かつて名を轟かせたこの国に入り込むことがないからだ。ここでは一歩進むごとに、心が萎える。大理石や石の遺跡に注意を向けていても、常に、生きた遺跡の姿にはっとなる。ギリシアでは夢想到浸ろうとしても無駄だ。悲しい現実が追いかけてくる (p. 902)。

今日のギリシアには二種類の遺跡がある。ひとつは石でできた遺跡、もうひとつは生きた遺跡、つまり人間である。前者は西洋文明がそこから発祥した、輝かしい古代ギリシアの尊ぶべき名残であるのに対し、後者はその生きた抜け殻である。彼らは生きながらにしてすでに過去に属しているのであり、古代ギリシア人の恥ずべき末裔、祖先の栄華に泥を塗る、憐れむ

べき存在なのである。

このように退廃し、墮落した人間たちに、いつの日か自分たちを支配するトルコのくびきを断ち切る力はあるのだろうか。作家は懐疑的である。

思うに、ギリシア人は、そう近い未来には自分の鎖を断ち切ることができるようにはならないだろう。彼らを抑圧する専制から自由になったとしても、すぐにはその鎖の痕跡は消えはしないだろう。専制の重圧に押しつぶされていただけでなく、二千年前から彼らは古びて、墮落した民族として存在していたのだ (p. 908 傍点論者)。

明らかにここではシャトーブリアンは、西洋に古くから見られる「ギリシア嫌い」(mishellénisme)の立場に立っている。ギリシア人が墮落したのは、正教徒になったからでも、またトルコの支配下に入ったからでもない。作家が言うには、この民族は、古代ギリシア文明が滅びたその瞬間からずっと退廃の状態にあったのである。そのような民族が、オスマントルコの支配から自由になり、今の隷属状態から脱するなどということは考えにくい。「ギリシア独立はとうてい困難」、それが『パリからエルサレムの旅程』刊行時のシャトーブリアンの考えである。

本稿の結論のひとつは、近代ギリシアに対するシャトーブリアンの見方が、1811年の旅行記初版の刊行時と、1826年の全集版刊行時では大きく変化したということを指摘することにある。シャトーブリアンは最初から、ギリシア人に共感を覚え、その独立を支持していたわけではない。実際に旅の途中で目にしたギリシア人は、惨めな「生きた遺跡」でしかなく、強国トルコから独立することなどはとうてい不可能と思われた。ところが、それから十五年後、作家は高らかに宣言する。「ギリシアは雄々しく自らの遺灰から出ようとしている。[...] ギリシアに住んでいる人々は、この高名な土地を踏みしめるのにふさわしいのだ²²。」シャトーブリアンは、《mishellénisme》から《philhellénisme》に舵を切ったのだ。

だが十五年の時を経ても変わらないものがひとつある。それは専制国家オスマントルコに対する嫌悪である。1807年7月4日、聖地エルサレム巡礼旅行から帰国したばかりのシャトーブリアンは、「メルキュール・ド・フランス」に寄稿した記事の中で次のように書いている。「私はかつて、その人柄と才能に敬意を払っている方々と同様に、絶対政府というものがあらゆる政府形態の中で最良のものだと考えていたが、トルコに数ヶ月滞在したことによって、そのような意見はすっかり改めることになった²³。」この文章は、若干の語句が変更された後、そのまま『パリからエルサレムへの旅程』に収められることになる。「その人柄と才能に敬意を払っている方々」、つまり「国王以上に王党派」と呼ばれるユルトラ陣営に属する人々と同様、シャトーブリアンは、かつては絶対王政を支持していた。その信念を変えることになったのは、ギリシアを始め、旅先の各地で目にしたトルコ人の姿だということである²⁴。

ギリシア人に対する見解が、時代を経て変化したのに対し、シャトーブリアンのトルコ人への嫌悪は一貫している²⁵。彼のトルコ人に対する、そしてイスラームの教義に対する過剰なまでの反発については、すでにさまざまな研究者が指摘するところである²⁶。それゆえ、ここではギリシア人との関連に限って、作家がこの「馬鹿げた暴君」(p. 909)についてどう考

²² 《Note sur la Grèce》, dans Chateaubriand, *Œuvres complètes*, éd. Philippe Antoine et Henri Rossi, t. VIII, IX, X, Honoré Champion, 2011, p. 119. この「ギリシアに関するノート」は1825年に刊行され、二度の再版を経た後、1826年の全集版の『パリからエルサレムへの旅程』に収録されている。

²³ *Mercure de France*, du 4 juillet 1807.

²⁴ 1807年5月11日、シャトーブリアンは聖地巡礼の旅から帰国する途中、パストレ夫人に宛てて次のように書き送っている。「絶対政府を推奨される方々には、トルコを一回りしていただくことをお勧めします。人気のない土地、意気消沈した人々、隷属がもたらす呆然、粗暴な権力、それらが絶対政府と軍事帝国のもたらす素晴らしい効果なのです。トルコは、ビザンツ帝国のあらゆる悪徳とあらゆる能力の乏しさを示しています。それらは人間的で穏やかな宗教によって改められることなく、むしろ血を好む、熱烈な宗教によって強められているのです。」Lettre à Mme de Pastoret, Pau, le 11 mai 1807, dans Chateaubriand, *Correspondance générale*, éd. Béatrix d'Andlau, Pierre Christophorov, et Pierre Riberette, Gallimard, t. I, 1977, p. 408.

²⁵ 1826年の全集版の序文で、作家自身が次のように言っている。「〔ギリシアに関する〕『ノート』でトルコ人を断じているのと同じように、『道程』でトルコ人を断じていることに気づかれるだろう。二つの著作が書かれた時代には、二十年の時間の隔りがあるにも関わらずにである。」(p. 699)

えていたのかを確認するだけにとどめたい。ギリシア人は確かに二千年の昔から退廃していたのかもしれないが、イスラームを信仰するトルコ人の支配下に入ったことでさらにその風俗を悪化させた。なにしろコーランは「いかなる文明の原則も、また人心を向上させる教訓も教えない」(p. 908)のだから、それも当然である。作家によれば、イスラームの害悪は伝染力を持つという。トルコ人の支配下に入った瞬間から、ギリシア人も必然的にその悪徳に侵されていくのである。

主人の信仰に触れたことで、ギリシア人たちは文学や芸術を諦めてしまい、運命の神の兵士に成り下がってしまったのだろう。そして絶対的な権力を持つ長官の気まぐれに盲従するようになってしまったのだろう。日々、あたりのものを荒廃させたり、絨毯の上で女性たちに囲まれ、芳香を焚かせて、うたた寝をしたりして過ごしてきたのだろう (Ibid.)

シャトーブリアンがギリシア人に対して批判的な見解を取る理由のひとつとして、トルコ人への強烈な反感の余波がある。トルコ人に関わるものは何であれ、彼にはいまわしく思えるのである。それが本稿の結論の二つ目である。そして、そのことによって実は、1820年代の作家の態度の変化も説明がつくのである。トルコの隷属化に置かれていたギリシアはいかにも嘆かわしいものだったが、そのギリシア人が何と、独立を勝ち取るべくトルコに対し武器を取ったのである。それは作家にとっては驚くべき出来事となる。かつて自分が立てた予測、すなわちギリシアの独立は難しい、という考えは外れてしまった。だがまさにそれゆえに、予想もつかなかったギリシア人たちのこの英雄的な姿はますます貴重なものに思えるのである。そして今こそ、かつての文明国ギリシアと現在の文明国フランスは、

²⁶ たとえば前出の以下の論文を参照。Jean-Claude Berchet, 《Le despotisme oriental》, art. cit., p. 212.

「自由」という尊い価値を持って結ばれるだろうと作家は想像する。「勇気、天分、技芸を通じて、ギリシアの長女であるフランスは、この高貴で不幸な国が自由を取り戻すのを、喜びをもって見つめるであろう²⁷」ギリシアが、野蛮なトルコの隷属状態から脱け出すことを、文明人であるシャトーブリアンは言祝ぐのである。

²⁷ 《 Note sur la Grèce 》, *op. cit.*, p. 120.